

Title	試論：20世紀前半期の華北郷村における公職人員の社会分層
Author(s)	渠, 桂萍; 坂井田, 夕起子
Citation	大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー. 2010-20 P.1-P.15
Issue Date	2010-12-25
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/13764
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>



**Osaka University
Forum on China**

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2010-20

**試論：20世紀前半期の華北郷村における
公職人員の社会分層**

(试述20世纪前期华北乡村公职人员的社会分层)

渠 桂 萍 (坂井田夕起子 訳)

試論：20世紀前半期の華北郷村における 公職人員の社会分層*

(试述 20 世纪前期华北乡村公职人员的社会分层)

2010年12月25日

渠桂萍[†] (坂井田夕起子[‡] 訳)

* 本稿は、2010年11月27日、大阪大学で開催した中国現代史研究会月例会における報告である。

[†] 大阪大学・法学研究科・外国人招へい研究員(中国太原理工大学・政法学院・副教授)
(blxqgp@163.com)

[‡] 大阪大学・法学研究科・特任研究員(ysakaida@law.osaka-u.ac.jp)

はじめに¹

清末の「地方自治」以来、村落権力の主役の身分・地位と階層・所属については、国内外に多くの論述があるが、しかし専門的系統的な研究はまだ行われていない。近代的国家政権が建設を指導した村級行政人員の階層構成の変化について、現在の研究の主要な成果は村の指導者エリートと土豪、無頼漢の二大グループについてのものであり、比較的一致している見方は、すなわち「郷紳の退場」と村の公職の劣化である²。

その原因は、プレゼンジット・デュアラの「国家政治権力の内巻化」の理論が極めて洞察に富んだ解釈の方法を提供している³。しかしフィリップ・ホアン、李懷印らの学者がみるところ、「郷紳の退位」はすべての村で発生しているわけではなく、一部の村では日本軍の侵略後に「保護型」のエリートが依然として公職を担い、投機分子は村の政権にとって替わることができず、各自の視角からこの現象に解釈を加えている⁴。

上述の討論と異なり、筆者は清末の新政から20世紀3,40年代以来、村の行政員のイメージは決して「郷紳」と「土豪」によって簡単に描くことのできないものであり、「エリート」「郷紳」の他にもその社会的地位が「郷紳」には及ばないが、かえって外部の特殊な能力による「能力型」の人材が公職を担い、また普通の貧民も脇役として参加したと考える。エリートや土豪以外の他の階層集団が担った権力の役割を検討することが、筆者の創意である。

この他、20世紀3,40年代には、多くの村では依然として「保護型」リーダーのエリートが公職

¹ 本論の基本的な資料は、中国農村慣行調査、山西档案資料、フィールドワーク調査資料であるが、紙幅の関係で明記していない。

² 費孝通らの研究者は、地方政府の官僚化の結果が地方保護の士紳エリートの退位を促し、土豪劣紳やごろつきを基層政権から排斥したと指摘した。

³ デュアラは以下のように指摘している。郷村の政権の内巻化は一種の悪性循環を創りだし、国家の税の増加は利益型ブローカーの増加をもたらし、利益型ブローカーの増加はさらに多くの税金を必要とした。このような環境の下、伝統的な村のリーダーは絶え間なく利益型ブローカーにとって替われ、村民たちは彼らを「土豪」「無頼漢」「地方ボス」と呼んだ。

⁴ ホアンは以下のように指摘している。20世紀前期の国家浸透圧力作用の下、華北農村は2種類の主要な変化形式を示した。1種類は、かなり安定している生態環境を持っており、自作農を主とする村落であり、外来の脅威に対処する時比較的緊密な結束を示した。このような村落は投機分子に村の政権を取らせることがなく、保護型村落の指導者は依然として村の公職を担当した。もう1種類は村の中の大部分が小農で多くがすでに半プロレタリア化した村であり、外来の脅威にさらされると容易に崩壊し、しかも無頼の徒に村内の政権を取られやすい。李懷印は以下のように指摘する。20世紀早期、「保護型」の村のエリートは辞職し、ごろつきが台頭した。このような現象は主に華北地区の土地が痩せて、村のコミュニティがゆるんだ「周辺」地帯に存在する。獲鹿を代表とした冀中南の「中心」地帯は、農民の諸税は重かったが、郷地制を継続させるため、村のエリートは舞台から退出するどころか、逆に村長あるいは県事会や参事会のメンバーとなり、そこを舞台に県の役所と駆け引きをし、県衙門の諸税等の増加の計画を挫折させた。このように村のエリートは20世紀初頭において明らかな連続性を示し、西方の学术界が強調した中断の現象はない。

を担っており、フィリップ・ホアンや李懷印らの解釈とは異なる状況があった。筆者は国家の圧力と見えない支配力の間緊張関係から、ある種の新しい解釈を試みたい。

また、土豪が村の公職を担当することに関して、以前の学界では多くが「盗む」「分を越えた」「奪取」などの単純なマイナスの定義で表現してきた⁵。そして全面的かつ一方的に、この集団が担った権力の役割をただ村に危害をもたらし、村人たちが彼らの行為にただ反対し、恨んでいたとしか理解してこなかった。学界は無頼たちが村の公職を担当したこと、村は一種の特別で、非日常的な「保護」を提供されたこと、もし村の暗黙の了解や同意がなければ、ましてや主導的な選択がなければ、彼らの意図は容易に実現できなかったことに、あまり注意を払ってこなかった。

あいまいさを避けるために、華北村落内に生まれた社会階層体系を予め説明しておく。

それは階級理論と異なり、「士紳エリート」理論とも完全には一致していない。すなわち、華北村落民衆は互いに熟知しているコミュニティの中で自己の地位を確定する尺度を有しており、彼らは通常村落の構成員を指導者階層、「能力型」階層、普通の民衆階層と弱者階層に分けている。その階層基準は経済資本、文化資本と社会資本などの多様な資本形式の「郷土資源」による。村落の指導者階層の権威と支配的地位の獲得は、多様な形式の資本による複合的な作用の結果であり、「能力型の人材」は往々にしてその特殊な「能力」によって郷土の貴重な資源を一定量占有し、コミュニティの中で限定的な支配力を有していた。一般の村民は郷土資源が相対的に欠乏し、コミュニティの象徴的な活動に参加しても、その資本の範囲において極めて大きな制限を受け、村落の指導者や能力型人材のどちらに対しても依存していた。弱者階層は郷土資源が極めて乏しく、彼らの生活はコミュニティの周辺であり、村民の同情や憐憫・哀れみの対象である。20世紀前期、村の公職人員は「郷村指導者」階層、「能力型」階層、「一般民衆」階層を主な構成員としていた。以下、具体的に検討していく。

・村落の指導者階層と権力の主役

1) 郷村指導者の「参政」とその原因

20世紀初め、清政府は内憂外患の圧力の下でしかたなく「新政」を実行し、国家権力は村落に対する浸透と延伸を始めた。国家は正式な権力機構を置いた最初の十数年で、新しい民族国家の意気盛んな「地方自治」のスローガンと旗印の下、「新政」は村落の各クラスの指導的エリートによって認知されたことを多くの資料が示している。

⁵ デュアラは以下のように指摘する。民国に入ると、国家権力の内巻化にともない、土豪は機に乗じて各種の公職を「盗み」、郷村政権の主流になった。この種の「土豪」が権力の主役となったことに対する単純なマイナス評価は、学界で広く受け入れられた。

「地方自治」を推進する以前，士紳たち指導者はずっと政府に協力する保甲人員を「賤役」とみなしていた。「地方自治」の最初の段階において，彼らはどうして直接政府とつながる自治人員になり，彼らが国家の正式な権力機構の一員に参加する必要があったのか？ 主要な原因は3つある。

まず，伝統的な郷村のコントロール組織が士紳を国家監視と抑制の対象としたのとは異なり，清末民初，村落の指導者が地方自治に参加したのは国家が意図して引きつけた結果である。

第2に，村落の指導者が「参政」したのはコミュニティでの彼らの地位を維持するという強烈的な意思によるものであった。

第3に，普通の民衆階層の視点から見ると，郷村の生存倫理と論理もコミュニティのエリートが郷村の公務という重任を引き受けるように求めていたのである。

2) 村落指導者の「退位」とその原因

20世紀の20年から30年代にかけて，北伐戦争に勝利して形式上全国を統一した国民党は，「地方自治」のステップを引き続きさらに深めた。しかし，歴史の進展は一種の矛盾した論理を示した。すなわち「地方自治」の不断の推進に従い，郷村社会の指導者の「参政」比率は下降し始めた。このような下降傾向は30年代末の日本軍の侵入に従い加速度的発展の趨勢を示し，40年代までに最低水準に達した。その原因は村落自治機関の指導者が陥った「官の差役」にある。

清末民初の地方自治以来，「国家」は自治の指導者に2つの基本的な役割を与えた。1つは最も低い階層における国家の代理人として，政府の職責を行使することであり，2つめは村のコミュニティの指導者として，以前の郷紳と同様，公共工事や村コミュニティの福利増進することであった。しかし，内憂外患に直面し，伝統社会から近代社会への転換に伴ってもたらされた巨大な財政圧力と戦乱の被害に揺れ動く構造の中で，国家は「自治」の徹底的履行という公約を果たすことができず，ただ村自治の公職人員が郷村から資源を吸い上げる代理となることを強い，民衆利益のための自治団体を建設することができなかった。

このような背景の下，村落行政人員は「自治指導者」から「官の差役」へと転落した。この種の「賤役」の身分は以下の3点が集中的に表れている。(1)村落行政人員は公務執行時において役務を遂行する道具になり，常に上級から課された任務を果たすことができないため役人から処罰を受け，ひどいときには殴られ，生命すら保証されない。(2)いつも経済的損失を被る。(3)公の権力を執行する中では声望を獲得することができず，さらに常に演じる「必要な」役割が村民の恨みを買う。

このとき，コミュニティでの名誉を維持するため，村の指導者達は近隣の人たちと対立するこ

とができず、「辞職」が彼らにとって最良の方法となる。しかし、村落の内部の見えない支配力、すなわち一般民衆の圧力によって村の指導者達のこの種の傾向は完全に願いどおりになることはなく、ひどいときには進退きわまることになった。

3) 見えない支配と村の指導者のやむを得ない事情

村落の権力構造の中で、一般民衆は決して発言権がないのではなく、実際に彼らはコミュニティの中できわめて強い「能動性」と「実務性」を持っていた。彼らの蔑視と不満を表現するに足る十分な空間が存在し、一般民衆の支配力は見えない方式で存在した。それは主に村落の世論であり、村の規約であり、地位評価の尺度であった。

村落指導者のコミュニティにおける地位は民衆が集団で評価し、推戴した結果であり、従って彼らは声望と名誉をとても気にかけた。さらに彼らは村の規約の制約を受けた。このように、コミュニティの見えない支配力は彼らの身の上に大きな作用を及ぼした。激動する政治環境のなかで、外界の村落に対する恫喝も激化した。そのような状況の下、表立って村落を保護する能力があり、村の指導者として最も適当な候補者たちは、国家が村の資源を略取し村の公職が「差役化」という状況のなかで、村の指導者はもはや「公職」に就くことを望まなくなった。しかし同時に、村落の見えない支配力によって村の指導者達は村の公務から容易に抜け出すこともできなかった。

国家からの圧力は村の指導者に「退位」を強制したが、しかし村落は見えない支配力によって村の指導者に多くの期待を寄せた。上下2種類の力が同程度の時、村の指導者は進退極まる可能性があり、ひどいときには「自殺」によって解決せざるを得なかった。村落の指導者は権力エリートに似ているが、特権的な手段は持っていなかった。次に、村落の一般民衆と村落の権力構造の関係を分析する。

・一般民衆階層と権力の主役

1) 村政から遠い一般民衆

20世紀前期の近代国家建設は、有効な民衆の村落政治参加による自治建設計画を達成できなかっただけでなく、多くの民衆は村の政治に対して比較的冷淡であった。一般民衆階層にとって、生活の貧困や知識のレベルと能力の限界により、根本的には郷村公務を考慮する能力も時間的余裕もなく、村落の公務から遠く離れていた。それは彼らが直面する、生存のための現実環境が創りだした「理性」的選択であったことを資料は示している。

外部の環境が戦争などによって激しい変化を生じたため、村落は巨大な圧力に直面し、村の公

職が「官の差役」の方向に変化しはじめた時、村落の指導者は次々に公職を回避し、一般民衆もそれを恐ろしいものであるとみなした。

しかし、私達が見る限り、1930～40年代、一般の貧しい家も村の公職において一定の割合を占めている。その原因はどこにあるのだろうか？

2) 一般民衆と権力の主役

1920～30年代、社会は揺れ動き、戦争が頻発し、匪賊が横行し、異なる性質の外来権力が村落の資源を略取する度合いが加速した。このことは、日本軍の侵入によって極限に達した。こうして村政の公職は「官の差役」に転化し、村落の多数の成員も敢えて表立って対処せず、「輪番制」で村落の職員を選ぶことが、比較的よく見られる方式になった。「輪番制」の下では、たとえ一般の貧しい家でも責任を逃れることができない。また、村落の裕福な家は貧しい家を雇うことによって「役目から逃れる」ことができた。このような状況の中で、一般の貧しい家が権力の主役つくという事態が出現した。

しかし総じて言えば、一般民衆はこのような役を演ずる貧家をトラのように恐れたため、たとえ雇用という方式で無理に村落の権力の舞台の上にあげることができたとしても、それは長くは続かなかった。村クラスの自治人員の「差役化」に伴い、圧倒的多数の階層の成員がみな公職担当を望まなくなった時、無頼型のタレントはそれを利益を図る絶好の機会と見なし、唯一彼らだけが村落においてこの「役目」を希望する階層となったのである。

・「能力型」階層と権力の主役

草の根の民衆の視野の中で、「能力型」階層はある種類の特殊な「能力」によって活躍する郷村社会の階層グループである。この階層は平凡な中の非凡な人々で、普通のなかで普通でない人々である。無頼型タレントはこの階層の成員の1種類に属する。

1) 「無頼型」タレントと権力の主役

(1) 郷村の無頼漢と権力の主役

清末から民国の時期、無頼型人材は華北郷村に大量に存在した。村民たちは通常このグループを「正業につかない」「ぶらぶらしている」と評していた。

比較的安定した生活状態の中で、「無頼型」タレントは村落の中で最も安定しない階層である。もし動乱や混乱の歳月に巻き込まれたら、社会において遊びほうけ、正業に就かず、それでいて生計の道をはかる郷村の無頼漢にとって、利益を図る絶好の時機である。日本軍の侵略によって

郷村の民衆の負担はさらに重くなり、村の公職は「苦役」の程度を深めたが、このとき無頼型タレントが公職に就く現象が顕著となった。

(2) 見えない支配力と無頼漢の「参政」

学界は一般的に、無頼型タレントの参政はただ村落に損害だけをもたらし、彼らの行為はある種の「盗み」であったと見なしている。もし村落の立場から問題を思考すれば、私達は無頼型タレントの参政は、ある意味では村落における理性的対応の一部であり、「機会に乗じた盗み」という単純なマイナス面だけと定義することはできない。

村落が外来政権の極端な浸食に直面した時、もし敢えて表に立ち外界との緩衝に対応しなければ、損失は極めて大きなものとなったであろう。山西襄垣県皮錢凹村村民の回想は、次のように述べている。「日本人が来たばかりの時、私達の村はまだ秩序を保っていなかった。日本人がくると至る所で物を外し、この部屋はすべて燃やされてしまった。その時の民衆はとても恐れた！この村が秩序を回復した後、ここの民衆はやっと少しずつ帰って来た。もし秩序を回復していなければ、ここの人たちはみな敢えて戻ってくることはなかったであろう。帰ってきたら殺されてしまうから。村の秩序が回復してからは民衆の生活もましになった。いやいやながらも皆家で生活することができた。」

村落はその他の階層の成員が希望しないか、あるいは敢えて表に立って外部に対応しないとき、無頼型タレントを選んで権力の主役を演じさせる。これは民衆が非日常の状態外部からの過度の要求に「消極的」にあるいは「理性的」に対応する行為であり、陽曲県西村における個別の事件の中で、私達は無頼型タレントが権力の主役を担当して引き起こした特殊な保護の作用を見ることが出来る。

山西陽曲県西村は、日本軍侵入後、富裕で声望ある村落の指導者は村長にならず、村の「すごい人」劉徳公が日本のカイライ県政府の支持下で村長になった。村長になる前、彼は村民にとって「いい人」ではなく、拳法を会得し、かつて外部の匪賊と結託して食糧を盗み、村の農地巡視役と殴り合った。このため村での信頼度は極めて低く、平日は小店舗でも一箱の煙草さえ彼に掛けて売らなかった。日本軍侵入後、劉徳公は村民から村長に選ばれた。彼は好き勝手に村の金銭を浪費し、飲み食いして、女性を囲った。悪習が多すぎるため、八路軍の襲撃を心配して、夜警を雇った。しかし、村民からすれば、彼は外来の各種勢力に対処する能力があり、日本のスパイ・売国奴・土匪らに対処することができた。最も混乱した時代に村ではひとりの死傷もださなかった。

いずれにしても、無頼型タレントを選んで村の公職を担当させることは、結局一種の消極的な外部に対する対処方法であり、村落が損害を被らないようにするための代価であった。「理性」的かつ「実際」的な村民は、可能なかぎりの状況の下で、依然として努めて無頼漢が権力の主役につくことを避け、「保護型」の公職人員を選択して外部との交渉をおこなわせたが、このような生存の策略は「村落の指導者」に対して要求を出す以外に、さらに通常郷村の能力型タレントの中の別の1グループ、すなわち声望型タレントに訴えることもあった。

2) 声望型タレントが権力の主役となる

「無頼型タレント」と同様、「声望型タレント」も村落の能力型階層の一グループであり、その突出した特徴は村落における道徳的世論その評価において比較的高い声望と良好な信頼を得ていたことである。彼らは経済的に豊かではなく、ひどいときには貧困ですらあり、文化的レベルも低く、時には非識字者であった。村落の指導者になることを勢力のある者が避けたとき、村民は「次善の策」として声望型タレントを村落の代表として対外交渉の重要な人材に選出した。

村落の指導者に比べ、声望型タレントは経済的に一般村民と差がなく、文化的権威でもなく、村の権力者でもない。しかし、彼らは対外交渉や公職事務の処理能力を備えていた。さらに重要なことは、彼らの行為と価値観が深く郷村の倫理と伝統文化の道徳的土壌に根差しており、この点から言えば、声望型タレントの村の公務における役割と村落指導者のエリートには相似した部分があった。そのため、彼らは村の指導者が公職を回避した時にも、村の公職人員の主要な階層グループの1つを担当することになったのである。彼らの「参政」は、同様に村落からの見えない圧力によるものであるとしなければならない。

まとめ

清末民初以来、中国基層社会の秩序には巨大な変化が発生し、行政機構と政府官員によって構成される国家権力も次第に郷村社会へと浸透していった。近代的な国家政権の浸透は郷村権力秩序の再構成の原動力となり、20世紀前期の華北村落権力の主役が不断に複雑に変化し、紆余曲折を経た劇の除幕となった。しかしながらそれは、劇の展開を推し進めただけでなく、国家政権の設置にとどまらず、村落の見えない支配力に由来する一般民衆の希求と合意が無視できない役割を果たした。1920年代末より、資源の略取を真の目的とする有名無実化した地方自治は、村の指導者に「退職」を迫ることになった。一般民衆は彼らの道徳への期待と無形の圧力によって、彼らの中の多くの人々は、簡単に権力の舞台から退出することはできず、依然として可能な範囲内で保護機能を行使した。上下の圧力が高まり進退極まったとき、ある者は村落を逃げ出さざるを

得ず、さらに自殺せざるを得ない者もいた。その村落の指導者が公職に就くことを望まないとき、土豪や無頼漢は唯一の就任を望む階層グループであった。土豪やならずものが公職を担当すると村落に対して大きな厄災をもたらした。しかし彼らには極端な非常事態の中で村落に一定の「特殊な」保護を与えた。従ってそれは、村落が保護を獲得するもうひとつの「能動的」な選択であった。たとえそうであったとしても、無頼漢という選択は村落の一定の損失を代価とする「消極的な」行為であった。このため、村落の指導者が心から公職就任を望まないとき、一般民衆は「退いて次善を求め」、より理性的な要求として郷村の能力型階層の別のグループ、すなわち声望型タレントを求めた。最後に、極端な情勢の下で、権力の空白を避けるため、「輪番制」も村落の一種の対応メカニズムであり、この種の場面では、一般の貧しい人々も村落の権力舞台の上で短期間ではあるが劇のストーリーに出演できたのである。

資 料

中国農村慣行調査（1981）6巻。

張成徳・孫麗萍（2005）：山西抗戦口述史，太原：山西人民出版社。

太原向陽鎮西村靳孝先老人（82才）口述整理，調査日時：2007年5月8日，地点：西村。

緒言¹

关于清末“地方自治”以来村庄权力主角的身份地位，阶层所属，国内外虽有不少论述都有涉及，但惜未展开专题系统研究，对于现代化国家政权建设所导致村级行政人员阶层构成的变化，目前的研究成果主要集中在村庄领袖精英与土豪，无赖两大群体身上，并有着比较一致的看法，即“乡绅退位”与村公职劣化²。究其原因，杜赞奇的“国家政权内卷化”理论提供了极富洞见的解释方案³，代表国内外较高的研究水准。然而，黄宗智，李怀印等学者看到，“乡绅退位”并不发生在所有的村庄，在一些村庄，即使日军入侵后，“保护型”精英仍担当公职，投机分子无法僭取村政权，并从各自的视角对此现象予以解释⁴。

与上述讨论不同的是，本研究将阐释，清末新政直至 20 世纪三四十年代以来，村公职人员的形象绝非“乡绅”与“土豪”即可简单摹画，在“精英”，“乡绅”之外尚有其社会地位虽不及“乡绅”，但却具备应付外界特殊能力的“能力型”人才出任公职的剧情，也有普通贫民参与的配角表演。对于精英，土豪之外的阶层群体担当权力主角的讨论，是笔者的创新性之一。

此外，20 世纪三四十年代，不少村庄仍继续演绎着“保护型”领袖精英担当公职的曲折剧情，与黄宗智，李怀印等的阐释角度不同，笔者将从来自于国家的压力与来自于村庄隐形支配力之间的张力尝试一种新的解释方案。

再者，涉及土豪无赖担任村公职，以往学界大多以“窃取”，“僭取”，“攫取”等单纯负面表达来定义⁵，普遍单向度地认为的这一群体担任权力主角只能给村庄造成危害，村庄民众对他们的行为只有反对，憎恨。学界并没有注意到无赖们出任村公职，也能为村庄提供一种特别的，非常的

¹ 本研究的核心资料是中国农村惯行调查（日文），山西档案资料，田野调查资料。因篇幅所限，资料部分基本隐去。

² 费孝通等学者指出，地方政府官僚化的结果促使充任地方保护的士绅精英退位，土豪劣绅、地痞流氓充斥基层政权。

³ 杜赞奇认为：乡村中的政权内卷化造成一种恶性循环：国家捐税的增加造成赢利型经纪的增生，而赢利型经纪的增生则反过来要求更多的捐税。在这种环境下，传统村庄领袖不断地被赢利型经纪所代替，村民们称其为‘土豪’、‘无赖’或‘恶霸’。

⁴ 黄宗智认为，20 世纪前期国家渗透压力的作用下，华北村庄显示出两种主要的演变形式。一种是有着相当稳定的生态环境，以自耕农为主的村庄，在对付外来威胁时表现比较紧密内聚。这样的村庄使投机分子无法僭取村政权，保护型村庄领袖仍担任村公职；另一种是村中大部分小农都已半无产化了村庄，在面临外来威胁时比较容易崩溃，也易于被不轨之徒僭取村内政权。李怀印认为：20 世纪早期，“保护型”村社精英辞职，地痞无赖趁机上台，这种现象主要存在于华北地区土地贫瘠、村社涣散的“边缘”地带。在以获鹿为代表的冀中南“核心”地带，百姓的税费有过之无不及，但由于乡地制的继续存在，村庄精英并未退出舞台，相反，纷纷被选为村长或县事会和参事会成员，并以此为舞台，跟官府讨价还价，屡次挫败了县衙门增加税款、税种的企图。因此，村庄精英在 20 世纪早期有明显的连续性，而非过去西方学术界所强调的中断现象。

⁵ 杜赞奇认为：进入民国以后，随着国家政权的内卷化，土豪趁机“窃取”各种公职，成为乡村政权的主流。此类对“土豪”担当权力主角行为含有单纯负面评价的表述，得到学界的普遍认同。

“保护”，并且如果没有村庄的暗合，同意，乃至主动选择，他们的意图并不能轻易得逞。

笔者不揣固陋，希冀突破已有的研究成果，对 20 世纪前期村公职人员的社会阶层地位作系统的考察，限于学力，不当之处在所难免，尚乞方家赐正。

为避免引起歧义和叙事清楚，有必要对华北村庄内生的社会分层体系予以简要交待。不同于阶级分层理论，与“士绅精英”理论也不完全吻合，华北村庄民众在彼此熟识社区中对其成员有着一整套自我的地位品评模式，他们通常把村庄成员区划为领袖阶层，“能力型”阶层，普通民众阶层与弱势阶层，其分层标准可归纳为经济资本，文化资本与社会资本等多种资本形式的“乡土资源”。村庄领袖阶层权威与支配地位的获得，是多种形式的资本共同作用的结果；“能力型人才”往往凭借其特殊“能力”占有一定量的乡土稀缺资源，在社区中拥有有限支配力；普通乡民拥有的乡土资源相对缺乏，参与社区象征性活动，获得象征资本的范围空间也受到极大限制，对于村庄领袖与能力型人才都有依赖性。弱势阶层的乡土资源极其匮乏，他们生活在社区的边缘，是村民同情，怜悯，救济的对象。20 世纪前期，村公职人员以“乡村领袖”阶层，“能力型”阶层，“普通民众”阶层为主要构成，下面我们分别讨论。

· 村庄领袖阶层与权力主角

1) 乡村领袖的“参政”及其原因

20 世纪初期，清政府在内忧外患的压力下被迫实行“新政”，国家政权开始向村庄拓展与延伸。大量的资料表明，国家正式权力建置的最初十几年，在新的民族国家雄心勃勃的“地方自治”的口号与旗帜下，“新政”得到村庄各个层次领袖精英的认同。

“地方自治”推行之前，士绅领袖一向视与官方打交道的保甲人员为“贱役”，而在“地方自治”的最初阶段，他们何以成为直接与官方沟通的自治人员，他们加入国家正式权力机构的动力何在？主要原因有三：

首先，与传统乡村控制组织将士绅作为国家监控与抑制的对象不同，清末民初，村庄领袖参与地方自治是国家有意吸纳的结果。

其次，村庄领袖“参政”亦出于维持其社区地位的强烈意向。

第三，从普通民众阶层视角来看，乡村生存伦理与逻辑也要求社区精英承担起乡村公务的重任。

2) 村庄领袖的“退位”及其原因

20 世纪二三十年代，随着内战的结束，国民党在形式上统一了全国，“地方自治”的步伐继续纵深迈进，然而，历史的发展却呈现出一种悖论：随着“地方自治”的不断推进，乡村社会领袖“参政”的比率却开始下降，这种下降的倾向随着 30 年代末日军的入侵呈现出加速度发展的态势，到了

40年代时达到了最低位，其缘由在于村庄自治机构的领袖被沦为“官之差役”。

清末民初以来的地方自治，“国家”赋予自治领袖两个基本角色，一是作为国家的最低层代理人，行使官方职责；二是作为村社领袖，像以前的乡绅那样，主持公共工程和增进村社福利。然而，在面临内忧外患，伴随着传统社会向工业社会转型所带来的巨大财政压力以及与兵祸匪患的动荡格局中，国家没有能够彻底履行“自治”的诺言，迫使村自治公职人员只承担了向乡村汲取资源的代理，而为民众谋利的自治团体公共建设几乎无从做起。

在此背景下，村政人员逐渐由“自治领袖”沦为“官之差役”，此种“贱役”的身份集中体现在以下三方面：一，村公职人员在执行公务时成为衙门役使的工具，经常因无法完成上级任务而受到衙吏的责罚，甚至殴打，乃至生命不保；二，常常遭受经济损失；三，在执行公务中不仅声望无从获得，还常常因所扮演的“要”的角色为乡民所恶。

此刻，为了维持社区名誉，村领袖们无法站在乡邻的对立面，“辞职”则是他们最佳方案。然而，来自村庄内部隐形的支配力——普通民众的压力却使得村领袖们此种倾向不能完全如愿，甚至进退维谷。

3) 隐形的支配与村领袖的被迫与无奈

在村庄的权力格局中，普通民众并非没有发言权，实际上，他们在社区事务中具有极强的“能动性”与“务实性”，有足够的空间来表达他们的蔑视与不满，普通民众的支配力以隐形的方式存在，其形式主要是村庄舆论，村规民约，地位评价模式等。

村庄领袖的社区地位是民众集体评价，拥戴的结果，在某种意义上说，他们十分顾及声望与名誉，更加受制于村规民约，社区隐形支配力在他们身上的作用更为显著。当政治环境动荡，外界对村庄勒索加剧，在此情形下，有能力出面保护村庄的，当属村领袖为最合适人选，国家的资源攫取压力而导致村公职的“差役化”迫使村领袖不再愿意出任“公职”，但同时，来自村庄的隐形支配力又使村领袖们无法从村公务中轻易脱身。

来自国家的压力迫使村领袖“退位”，而源于村庄的隐形支配力却对村领袖充满期待，当上下两种力量挤压到一定程度时，村领袖则可能进退维谷，甚至“自杀”以求解脱。村庄领袖看似权力精英，却有种种无奈与叹息。下面我们接着分析村庄普通民众与村庄正式权力结构的关系。

· 普通民众阶层与权力主角

1) 普通民众远离村政

资料显示，20世纪前期的现代化国家的政权建置，并未达到有效动员民众参与乡村自治建设的政治企图，多数民众对村政是比较淡漠的，对于普通民众阶层来说，由于生活贫困，知识水平及能

力的限制，根本无暇也没有能力顾及乡村公务，远离村庄公务，可以说是他们面对生存现实环境所作出的“理性”选择。

当外部环境由于战争等原因发生剧烈变动，村庄面临巨大的物质索求压力，村公职人员开始向“官之差役”方向演绎时，村庄领袖纷纷规避公职，而普通民众更视之为畏途。

然而，我们却看到，20世纪三四十年代，普通贫户担当村公职占了一定比例，其原因何在？以下我们接着分析。

2) 普通民众与权力主角

20世纪二三十年代，社会动荡，战争频仍，匪患加剧，不同性质的外来政权向村庄的物质索取程度加大，日军的入侵，将此一倾向推到极致。于是，村政公职向“官之差役”转化，村庄多数成员不敢也不愿出面应对，“轮流制”就成为村庄选择村职人员的一种较常见的方式。“轮流制”下，即使普通贫户也无法躲避责任。此外，村庄富户可能通过雇佣穷户的方式而试图“逃役”。这种场景中，就出现了普通贫户担当权力主角的剧情。

但是总的来说，普通民众对于这样的角色是畏惧如虎的，即使通过被雇佣的方式勉强出现在村庄权力舞台上，时间也维持不久。随着村级办理自治的人员“差役化”，绝大多数的阶层成员都不愿意充任公职时，无赖型能人却视之为谋利的绝好机会，他们是唯一愿意充任此“役”的村庄阶层群体。

. “能力型”阶层与权力主角

在草根民众的视野中，“能力型”阶层指凭借某种特殊的“能力”活跃在乡村社会的阶层群体。这一阶层是平凡中的不平凡者，普通中的不普通者。无赖型能人则属这一阶层成员中的一类。

1) “无赖型”能人与权力主角

(1) 乡村无赖与权力主角

清末与民国时期，无赖型能人在华北乡村大量存在。村民们通常用“不务正业”，“游手好闲”来评价这一群体。

在较为稳定的生活常态中，“无赖型能人”是村庄中最不安稳的阶层群体，如果恰逢动荡与混乱的年月，对于游荡在社会且以不务正业为存在和谋生方式的乡间无赖来讲，实为谋利的极佳时机，随着日军的入侵，乡村民众负担进一步加重，村公职沦为“苦役”程度加深，无赖能人充任公职的现象更为突出。

(2) 隐形支配力与无赖能人“参政”

学界普遍认为，无赖能人的参政只是给村庄带来损害，他们的行为是一种“窃取”行为。如果站在村庄的角度思考问题，我们则看到，无赖能人的参政，在某种意义上，有村庄理性的一面，并不能完全用“趁机窃取”单纯负面定义。

当村庄面临外来政权的过度侵蚀时，如果完全失去了敢于出面与外界周旋的缓冲，损失将极为惨重，山西襄垣县皮钱凹村村民回忆说：“日本人刚来的时候，咱这个村还没维持嘞。这日本人一来，就给你到处挑拆，把这房呀就都给烧了。当时的老百姓可是怕嘞！后头这村儿维持了以后，这老百姓才都慢慢回来呀，要不维持，这人就都不敢回来。回来叫弄住就给杀了。……当时维持了以后村里的老百姓还好些，都还能在这家里瞎胡过。”村庄在其他阶层成员无人愿意或敢于出面应对外界时，选择无赖能人扮演权力主角，是民众在非常情境中应对外界过度索求“消极”但却“理性”的行为，阳曲县西村个案中我们可看到无赖能人充任权力主角所起的特殊保护作用：

山西阳曲县西村，日军入侵以后富裕而有威望的村庄领袖无人出任村长，村中的“厉害人”刘德公在日伪县政府的支持下当了村长。在当村长之前，他在村民心目不是个“好人”，因会点拳术，曾经勾结外匪偷盗粮食，与村里巡田者交过手。由于信用度极低，平日小商铺连一盒烟都不愿赊给他。日军入侵后，刘德公被村民选为村长，任意挥霍村款，大吃二喝，包养女人。因恶习太多，担心八路军袭击，雇佣夜警巡夜；但是，在村民看来，他有能力应付外来的各种势力，与日本的便衣，汉奸，土匪均能周旋，在最混乱的年代里村中没有伤亡一人。

无论如何，选择无赖型能人担任村公职，毕竟是一种消极应对外界的方式，是以村庄遭受损失为代价的，对于“理性”与“务实”的村民，在尽可能的情况下，仍是力求避免无赖担当权力主角，选择“保护型”的村庄公职人员作为代表他们与外界打交道的媒介，这种生存策略除了对“村庄领袖”提出要求外，还经常诉诸于乡村能力型人才中的另一群体——声望型能人。

2) 声望型能人充当权力主角

与“无赖型能人”一样，“声望型能人”也是村庄能力型阶层的一个群体，其突出特征在村庄的道德舆论评价体系有着较高的声望与良好的信誉。他们经济上并不富有，甚至较为贫穷；文化水平也相当有限，甚至是文盲，当村庄领袖，有势力者规避公职时，村民“退而求其次”，声望型能人成为代表村庄对外交涉的重要人选。

与村庄领袖相比，声望型能人的经济地位与普通村民无异，也不是文化权威，更不是村中权势之人，但是，他们具备对外交涉，办理公事的能力，更重要的是，他们的行为与价值观深埋于乡村伦理规范与传统文化的道德土壤中，从某种意义上说，声望型能人在村公务中的角色与村庄领袖精

英有着相似之处，因此，他们在村领袖规避公职时，也是充任村公职人员的主要阶层群体之一。他们的“参政”，同样有着来自村庄的隐形压力。

结 论

清末民初，中国基层社会秩序发生了巨大变化，行政机构和政府官员所构成的国家力量逐渐进入乡村社会。现代化国家政权的下沉成为乡村权力秩序重构的原动力，由此拉开 20 世纪前期华北村庄权力主角不断变化的复杂而曲折剧情上演的序幕，然而，推动剧情展开的，却不只于国家政权的建置，来自村庄的隐形支配力——普通民众的诉求与认同起着不可忽视的作用。20 年代末期以后，以资源索取为真实意图，有名无实的地方自治迫使村领袖意欲“辞职”，而普通民众对他们的道德期待与无形压力使得他们中的许多成员无法轻易从权力舞台中隐去，仍在力所能及的范围内行使保护功能，当上下两种压力加大，他们进退维谷时，有的不得不逃离村庄，更有甚者，以自杀解脱；当村庄领袖不愿出任公职，土豪无赖是唯一愿意任职的阶层群体，土豪无赖担任公职对村庄造成很大危害，但他们在极端与非常情势中也对村庄有一定的“特殊”的保护，是村庄寻求保护的另一种“能动”选择。尽管如此，选择无赖能人是以村庄一定损失为代价的“消极”行为，为此，当村庄领袖根本不愿意出任公职时，普通民众“退而求其次”，更多的理性诉求于乡村能力型阶层的另一群体——声望型能人。最后，在极端情势下，为了避免出现权力真空，“轮流制”也是村庄的一种应对机制，此种场景中，普通穷户在村庄的权力舞台上也有短暂的出演剧情。

资 料

中国农村惯性调查（1981）全 6 卷。

张成德·孙丽萍（2005）：山西抗战口述史，太原：山西人民出版社。

太原向阳镇西村靳孝先老人（82 岁）口述整理，调查日期：2007 年 5 月 8 日，地点：西村。

试述 20 世纪前期华北乡村公职人员的社会分层

渠桂萍（坂井田夕起子译）

Social Stratification of Village Officials in Rural North China in the First Half of the 20th Century

QU Guiping (trans. SAKAIDA Yukiko)

要 約

清末の「地方自治」以来、村落権力の主役の地位・階層・所属は国内外に多くの論述があるが主要な成果は村の指導者エリートと土豪・ならず者についてのものである。その原因は、ブレゼンジット・デュアラの洞察に富んだ解釈やこれに異議を唱えるフィリップ・ホアン、李懷印らの学者の先行研究の存在であろう。これらの先行研究に対して、筆者は、清末の新政から 1930～40 年代まで、村の行政員のイメージは決して「郷紳」と「土豪」の 2 つでは単純に描くことのできないと思う。本稿では、「エリート」「郷紳」の他にもその社会的地位が、外部の特殊な能力による「能力型」の人材が公職を担い、また普通の貧民も脇役として参加したことを確認する。また 1930～40 年代には、多くの村が依然として「保護型」リーダーのエリートが公職の役割を担ったことを指摘することによって、国家の圧力と見えない支配力との緊張関係から新しい解釈を試みる。さらに従来の研究において単純かつ消極的評価しかされなかった土豪やごろつきについて、彼らも村にある種の特別で非日常的な「保護」を提供したこと、もし村の暗黙の了解・同意がなければ、彼らの意図は容易に思いどおりにならなかったことを強調する。

担当委員：田中 仁

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>